

令和 7 年度第 2 回千葉県県民活動推進懇談会 開催結果概要

1 日 時

令和 7 年 1 1 月 2 1 日（金）午後 2 時から 4 時まで

2 場 所

千葉県庁本庁舎 2 階千葉県県民活動情報オフィス内ミーティングスペース

3 出席者

鎌田委員、関谷委員、牧野委員、山本委員、高橋委員、石毛委員、伊藤委員、橋爪委員

※以上 8 名

事務局 6 名（課長、副課長、県民活動推進班長、県民活動推進コーディネーター、担当 2 名）

4 議事の概要

議事（1）「千葉県県民活動推進計画（令和 8 ～ 1 2 年度）」の計画素案について

○鎌田座長

最初に、本日の懇談会の開催結果概要については、事務局で取りまとめた後、各委員に確認いただいた上で千葉県ホームページに掲載しますので、あらかじめ御了承ください。

それでは、早速、議事に入りたいと思います。議題 1 千葉県県民活動推進計画（令和 8 ～ 1 2 年度）」の計画素案について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局

千葉県県民活動推進計画（令和 8 ～ 1 2 年度）」の計画素案について御説明させていただきます。

計画素案については、骨子案をベースとしまして、前回の懇談会での皆様の御意見や、若者への意見聴取を踏まえ、現計画に肉付けをし、作成させていただきました。

計画素案の概要を資料 1、全体版を資料 2 としてお配りしております。御手数ですがお手元には資料 1 と資料 2 の両方を御用意いただければと思います。

まず、第一章「計画策定の基本的な考え方」です。資料 2 の 1 ページをお開きください。

計画策定の趣旨としまして、前段で、本件を取り巻く環境の変化が進む中で、県民一人ひとりが地域課題を自分のこととして捉え、主体的・自主的に取り組むとともに、多様な主体が連携・協働して取り組んでいくことの重要性といった県民活動に対する基本的な考え方について述べています。そして、後段では、台風などの災害の経験を踏まえた「共助」の意識の高まりや、東京オリンピック・パラリンピック大会を契機としたボランティア活動への参加機運の醸成などを背景とした県民活動の広がり、加えて、近年では、

多様な主体が、連携・協働して取り組んでいる中で、地域の課題解決にとどまらない、新たな地域の魅力や資源を発見する活動も生まれているという点に触れる一方で、ボランティア活動への関心や参加が、世代により偏りがあるなどの課題や、新型コロナウイルス感染症の拡大を契機として、市民活動団体の運営基盤が依然として厳しい状況にある点を述べています。

これらの状況を踏まえ、各世代のライフステージに応じた参加機会の提供や、多様な主体による新たな価値の創出につながる取組である「共創」の推進など、県民活動の更なる促進に取り組んでいくことを、新たに計画の策定を行う趣旨としています。

続きまして、資料2の2ページをお開きください。

「2計画の性格」は、新たな千葉県総合計画「千葉の未来をともに創る」を踏まえ、取り組むべき方向性等を定めるものです。

次に、「3計画の期間」ですが、骨子案でも御説明しましたとおり、計画に基づく取組を着実に進めていくため、現行の3年間から、令和8年度から令和12年度までの5年間としております。

次に、今回追加しました部分で、「4計画策定の取組」ですが、新たな計画策定に当たり、本懇談会において委員の皆様から意見や助言・協力をいただいていることに加えまして、県内大学の学生へヒアリングやアンケート調査などの意見聴取を実施し、様々な視点や意見を反映させて計画の取組内容を検討しているということを記載いたしました。

続きまして、資料2の3ページの「用語について」ですが、一番下の「協働」につきましては、その次のページに「共創」を加えさせていただいた関係で、「地域の課題解決など」の文言を追加しました。その「共創」の定義につきましては、前回の懇談会において、「新たな価値を生み出さなければいけないとプレッシャーに感じるのではないか」ですとか「共創が連携・協働からのホップ・ステップ・ジャンプに見えてしまう」といった御意見がありましたので、こういった御意見などを踏まえ、「発展型」と「創造型」の2分類を削除した上で、共創は「新たな価値の創出」を目的とした取組ではなく、地域への愛着や地域社会をより豊かにしていこうとする思いを発端に取り組んでいる中で、自然発生的に、地域の新たな魅力の創出や資源の再発掘といった新たな価値が創出されるという定義としています。「地域への愛着」という言葉は、前回の懇談会でも委員の皆様から御意見があったことに加え、後ほど御説明いたします、大学生への意見聴取においても、「地域への愛着が活動の原点」といった意見があったことも踏まえ、「共創」の入口の1つとして記載しました。

下に掲載しております図につきましては、前回の懇談会では「多様な主体による連携・協働・共創のイメージ」として提示させていただきましたが、「共創は実践に着目した概念である」という御意見が

あったことなどを踏まえ、「共創のイメージ」として整理しました。イメージ図の枠囲みの中については、前回の懇談会において「イメージ図のより中心に近いところをより詳しく示したほうがよい」そして「真ん中の部分は、攻めと守り、魅力創出と課題解決、こういった2つの軸で整理してはどうか」といったご意見をいただき、こうした御意見を踏まえ、イメージ図を作成しました。

また、前回の懇談会での御意見を踏まえ、「企業」に「事業者」を追加することで、多様な主体の関わりを表現いたしました。

続きまして、「第二章 県民活動の必要性とその意義」です。県民活動の定義、必要性、意義と主な主体とその役割につきまして、現計画の内容を踏まえて、連携・協働に共創を加えるなど、少し文言の整理をさせていただいたところです。

続きまして、資料2の9ページになりますが、「第3章 前計画における県の取組と評価」でございます。

1の「前計画における県の取組状況」でございますけれども、これまで取り組んできた事業の主なものについて、その実施概要をまとめて記載しています。今回追加しました部分としまして、「(1) 県民活動への理解や参加の促進・定着」では、「地域ボランティア活動環境整備事業」として、ボランティア活動を希望する個人と受入団体をつなぐマッチングサイト「ちばボランティアナビ」の運営や、ボランティア受入団体の開拓や体制整備の支援などについて記載いたしました。

また、10ページの「(3) 多様な主体による連携・協働の促進」では、今年度に「ちばコラボ大賞」が15回目であったことを記念して、過去に受賞した団体による事例発表などを行う特別講演会を開催したことや、ちばコラボ大賞の趣旨に賛同する企業等が選考し表彰を行う特別賞を新たに創設したことを記載いたしました。

続きまして、11ページの「2 成果指標の状況」ですが、現計画で立てている3本の柱に紐づく7つの指標について、達成・未達成の原因の分析を記載しております。

なお、県政に関する世論調査及びNPO法人実態調査につきましては、令和6年度までの結果を記載しておりまして、間もなく令和7年度の最新の調査結果が出るということでございますが、その結果を踏まえ、傾向が変わっている箇所につきましては、書き直しを行いたいと思っております。書き直しを行う箇所につきましては、次回以降の原案の際に反映し、御説明を行いたいと思います。

「(1) 県民活動への理解や参加の促進・定着」では、令和6年度までの実績としてはいずれも目標値を下回っており、働き世代の参加が伸び悩んでいることが要因の一つとして考えております。

なお、「ボランティア活動に継続して参加している人の割合」については、資料内では増加傾向にある

と記載しておりますが、令和7年度の調査結果の速報値によると、令和5年度、6年度よりも減少しているようですので、こちらの記載については後日修正し、改めて御説明させていただくことになると思われます。

12ページの「(2) 市民活動団体等の基盤強化等の支援」では、「市民活動団体の活動への参加」については、令和6年度実績で27.0%と目標値を下回る見込みである一方で、「寄附を受けたことがあるNPO法人の割合」は、令和6年度実績で70.1%と、目標値70.0%を上回っております。

続きまして13ページの「(3) 多様な主体による連携・協働の促進」では、「地域の様々な主体と連携している市民活動団体の割合」が令和6年度は前年度比で3.0ポイント減少し61.1%と目標値を下回る見込みである一方で、「市町村行政・県行政と市民活動団体との協働事業の件数」については、令和6年度実績で686件と目標値を上回っております。

これらの成果指標につきましては、先ほど申し上げましたとおり、今後取りまとめを行う令和7年度の調査結果を踏まえ、次回以降に改めて御説明させていただきたいと思います。

次に、「第4章 県民活動を取り巻く情勢と課題」についてです。人口減少及び少子高齢化の進行、孤独・孤立の問題の顕在化・深刻化など、「社会環境の変化とそれに伴う課題」について、14ページから18ページまでまとめております。

現計画からの主な変更点としては、まず、16ページの「(3) 多様な人材の社会参加の促進」ですが、これは現計画では「外国人の増加」としておりましたところを、こどもや若者、外国人など、すべての県民が地域社会の担い手として共に助け合って活躍していく視点がより一層重要となっていることからこのように修正させていただきました。

また、18ページ「(6) ウェルビーイングの推進」ですが、これは現計画では「ワーク・ライフ・バランスの推進」としておりましたところを、近年、価値観やライフスタイルが多様化する中で、長時間労働の是正や、副業等の促進など、働き方の多様化も進み、個人の幸福感やウェルビーイングを重視する価値観が浸透しつつあることから、働き世代などが、県民活動の担い手として活躍できる環境の整備が重要となっていることを踏まえ、このような記載とさせていただきました。

続きまして、19ページから28ページまで、「県民活動をめぐる現状と課題」の「県民活動の現状」として、本県の状況を整理し記載しております。

こちらにつきましても、今後取りまとめを行う令和7年度の調査結果を踏まえ、記載内容の修正を行うと思われますが、現計画をベースとしまして、令和6年度までの調査結果を基に記載しております。内容としましては、19ページから21ページまでを「(1) 県民活動の理解・参加」として、県民活動への

関心やボランティア活動経験などから見える現状と課題、22ページから25ページまでを「(2) 市民活動団体の状況」として、法人運営上の課題や新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた活動状況など、26ページから28ページが「(3) 連携・協働をめぐる状況」として、連携・協働の経験の有無や協働によるメリットなどとなっております。

ここで、今回新たに、若い世代の県民活動との関わりや思いなどの現状を把握し、裾野の拡大につなげていくため、県内大学への意見聴取を実施しましたので、その内容を併せて御報告させていただきます。

今回、県内の3つの大学に御協力をいただき、ヒアリングやワークショップ、アンケートを実施し、ボランティア活動への関心や参加促進、地域の魅力向上などについて、意見聴取を行いました。実施方法としましては、例えば、千葉工業大学では鎌田先生に御協力いただき、先生の講義の中で学生101名に対して、まずは県民活動の定義や現計画における取組内容等についての講義を行った後、主にアンケートを実施しました。

主な意見としましては、「活動に参加する理由」として、「家や大学以外での人間関係や居場所づくりにつなげたい」であるとか、「自分の学びや経験になると思ったから」という意見があったほか、「地域に愛着があり、地域や社会のためになると思えたから」という意見がありました。

また、アンケートでは「ボランティア活動に参加した理由」として、「地域や社会への貢献」が、「家族や友人等からの勧め」の次に多くなっています。

次に、「参加する際に不安に感じる事」として、「初めてでも気軽に参加できるのか」、「活動内容がどんなものなのか」、「どんな年代の方が多いのか」といった意見がありました。

次に、「若い世代が活動に参加するために必要なこと」として、先ほど不安に感じる事として挙がっていた、「活動内容などが「見える化」していること」や、「行政などの信頼できる機関からの情報発信があること」といった意見がありました。また、情報収集の媒体としては、SNSやホームページの利用が多いようでしたが、実際は「SNSなどは情報が多すぎるため、チラシや回覧板などの紙媒体も効果的である」という意見がありました。

また、アンケートでは「若い世代の参加を増やすために必要なこと」として、最も多いのが「参加手続きが煩わしくないこと」、次が「活動情報が簡単に入手できること」といずれも約半数の方が回答しています。

次に、「就職した後など、ライフスタイルが変化した後を含めて、活動の継続のために必要なこと」としては、「一人で安心して楽しく活動に参加できること」や「気軽に「週末に1時間のみ」など、無理なく参加できること」といった意見のほか、「地域への愛着があれば、メリットが無くても地域のためであ

れば参加する」といった意見がありました。

また、アンケートでは、「卒業後ボランティア活動に参加したいか」という問いに対して、「ときどき活動したい」と回答した人が7割を超え、「定期的に活動したい」とした人と合わせると約8割の人が卒業後も活動したいと回答しています。

最後に、魅力的な地域づくりのために必要なこととしては、やはり地域への愛着ということで、「子どもの頃に子ども会に参加したり、お祭りなどの地域のイベントに参加したといった経験があると、大人になってからも地域のために活動したいと思える」という意見がありました。

若者への意見聴取についての報告は以上となります。

続きまして、資料2の計画素案29ページから31ページまで、「県民活動の促進に向けた課題」として、先ほどの「Ⅰ 県民活動の状況」や若者への意見聴取を踏まえ、課題を大きく3つにまとめさせていただきました。

一つ目に、「（１）県民活動の裾野の拡大や継続的な参加の促進」ということで、台風などの災害の経験を踏まえた「共助」の意識の高まりや、東京オリンピック・パラリンピック大会を契機としたボランティア活動への参加機運の醸成などを背景とした県民活動の広がりがある一方で、ボランティア活動への関心や参加が、世代により偏りがあるという状況を踏まえ、より多くの方が県民活動への理解を深め、多様な世代の方に参加を促すことができるよう、「ちばボランティアナビ」を活用した参加機会の提供や情報発信など、働き世代の方などがライフステージに応じて活動に参加できる機会の提供に取り組んでいく必要があることを述べさせていただきました。

二つ目は、「（２）市民活動団体等の持続的な活動に向けた基盤強化」でございます。新型コロナウイルス感染症の影響からは脱却しつつあるものの、これまでも指摘されているとおり、団体内の高齢化や後継者不足、資金不足など、多岐に渡る問題を抱えており、研修の実施や学び合う機会の提供、プロボノを活用した団体支援などを通じて、団体の持続的な活動の支援を行っていく必要があることを述べさせていただきました。

三つ目は、「（３）地域における多様な連携・協働・共創の促進」でございます。連携・協働の経験のあるNPO法人の多くが、そのメリットを感じているものの、相手方とのコミュニケーションや人材及び資金面での懸念などから、連携・協働の経験がある割合は減少傾向にあります。一方で、近年は、地域への愛着や地域社会をより豊かにしていこうとする思いなどを背景として、学校や大学を含む多様な主体による、地域の課題解決にとどまらない、地域における新たな魅力の創出や資源の再発掘、新たなサービスの創出など、新たな価値が創出される「共創」の取組も生まれていることから、多様な主体による連携・

協働・共創を促進していくことが重要であるということを述べさせていただきました。

次に、資料３２ページの「第５章 施策の方向性」でございます。

具体的に施策として何を取り組んでいくのかということですが、前回骨子案において、「目指す千葉県の姿」を、千葉県総合計画の基本理念を踏まえ、「誰もがライフステージに応じて県民活動に参加し、地域のみんなの力で未来をともに創る千葉県」をお示ししましたが、地域のみんなの力を結集することにより、新しい千葉の未来をともに創っていく、という内容を記載いたしました。

３３ページの「施策の体系」ですが、前回骨子案において御承認いただいたところですが、細かなところですが修正しております。まず、「施策の体系図」内の「ともに作る千葉県」の「ともに」という文言を総合計画の表記に併せまして、漢字からかな表記に変更させていただきました。また、「行動計画」「（２）ライフステージに応じた県民活動の参加機会の提供と定着の促進」につきまして、前は「県民活動の体験機会」としておりましたが、ライフステージに応じて、体験の機会の提供だけではなく、多様な参加機会を表現するため、「参加機会」と表記を改めさせていただきました。最後に１箇所、「行動計画」の一番下の「（２）市民活動団体等と県・市町村との協働の推進」にも「共創」を加えさせていただきました。

それぞれの「施策の方向性」ごとに紐づく取組については、３４ページから記載させていただきました。

まず、「施策の方向性１ 県民活動への理解や参加の促進・定着」ですが、先ほど、大学生からの意見聴取において、ＳＮＳなど様々な媒体を活用し、情報を得ていることや、「信頼できる機関から、簡単にできるだけ詳細な情報を得たい」という意見があったほか、「初めてでも気軽に参加でき、気軽に「週末に１時間のみ」など、無理なく参加できる活動があるとよい」という意見があったことなどを踏まえ、
【行動計画】（１）県民活動の普及啓発の推進として、多様な世代に対し、各種広報媒体を効果的に活用していくことを記載しているほか、（２）ライフステージに応じた県民活動の参加機会の提供と定着の促進として、マッチングサイト「ちばボランティアナビ」の運営やボランティアの活動経験がない方でも気軽に楽しみながら活動に参加できるよう、体験会を実施していくことを記載いたしました。

次に、３６ページ「施策の方向性２ 市民活動団体等の基盤強化等の支援」ですが、【行動計画】（１）市民活動団体等の組織運営力等の向上支援として、市民活動団体等のマネジメント力を高めるための研修等を引き続き実施していくことに加え、プロボノの受入支援などにより人材確保に向けた支援を行うほか、（３）民が民を支える仕組みの普及・支援として、民間の助成情報をＳＮＳなどを活用し周知していくことなどを記載いたしました。

次に、３８ページ「施策の方向性３ 多様な主体による連携・協働・共創の促進」ですが、２段落目に

共創の取組を促進していくことを記載したことに加え、3段落目には、前回の懇談会において、「イメージ図の中心が目指すべき共通の認識で成果であることに對し、次の世代や横のつながりを表すために矢印を双方向に付ければよいのではないか」といった意見があったことを踏まえ、「連携・協働・共創の取組を契機として、他の主体の経験や知識から学び、自身のスキルを磨くことができるとともに、異なる背景や価値観を持つ人々との関わりを通じて、多様な考え方や新たな気づきを得ることができる」ことを記載いたしました。

さらに、大学生からの意見聴取においても、「地域への愛着があり、地域のためになれば継続して活動する」という意見があったほか、前回の懇談会においても、地縁組織などが持続的に活動していくことが重要で、地域コミュニティの再構築と横断的な事業展開が共創の柱の中心であるという御意見も踏まえ、

【行動計画】（1）地域コミュニティにおける様々な主体の連携・協働・共創の推進として、様々な主体による連携・協働に加え、「共創」の理解を深め、その意義や効果等を周知し、各地域で推進する契機となるよう、講演会や交流会、ワークショップ等を実施するほか、多様な主体による優れた事例を表彰する「ちばコラボ大賞」においても、「共創」の観点を加えた地域づくりの促進を図っていくことなどを記載しました。

最後に、第6章ですが、推進体制及び進行管理になりますけれども、ここについては引き続いて現計画と変わらず、懇談会と庁内の体制を整え、進行管理も年度ごとに行っていきたいと思っております。

長くなりましたが、計画素案本文につきましては以上になります。内容につきまして、御意見御助言をいただけると大変有難いと思っております。

それと、もう一つ引き続きで大変恐縮ですけれども、現計画においても取組の事例や、あるいは用語の解説などを資料編の中に入れてございますが、このような記載があることで、普段県民活動に馴染みのないような方でも、理解が深まるのではないかとということで、次期計画でも何か入れられたらと考えているところでございます。

現計画では、参考事例として、例えば令和元年房総半島台風の際のボランティア・市民活動団体の活動や、オリンピック・パラリンピックの都市ボランティアの取組を取り上げたところでございますが、次期計画では、例えば、ボランティアマッチングサイトの運営などを取り上げるほか、プロボノやクラウドファンディングの活用事例などで何か参考となるものがあればぜひ掲載していきたいというふうに思っております。さらに、今後推進していく共創の事例についても、我々としても、コラボ大賞の事例などを載せたいと考えていますが、県内市民活動支援センターの取組も含め、良い取組があればと思っております。

我々も取組の具体的事例が分かってないというところもございますので、是非参考となる取組が

あれば御教示をいただきたいと思います。

それから、用語の解説として、現計画では、先ほども申し上げたプロボノやクラウドファンディングなどについて掲載しておりますけれども、次期計画では、「県民活動を担う多様な主体」を追記したいと考えております。これは、近年NPO法人以外の団体等についても、様々な取組がされていると聞いていますので、その辺りの解説も付けていきたいと考えております。これ以外にも、県民活動を取り巻く新しい潮流やこれは大切にしたい方がよいのではないかとといったものがあれば是非御意見をいただければと思います。

かなり長くなってしまいましたけれども、説明は以上でございます。

○鎌田座長

ありがとうございます。

色々と御説明いただきましたが、進め方としましては、まず計画素案の全般について、特に、資料2の4ページ共創のイメージ図がポイントになると思いますので、御意見をいただければと思います。また、それに併せて、大学生の意見聴取の結果や、この結果をどのように計画に反映させるかといった点についても、御意見・御感想を頂戴できればと思います。

そして、私も何度か本計画の策定に関わってきていますが、どうしても本編には記載しきれないところがあり、読む人の理解を促すためにも資料編が大分活躍していると思いますので、最後に、その点についても色々とアイデアをいただきたいと思っています。

○鎌田座長

早速ですが、橋爪委員いかがでしょうか。どこからでも結構です。

○橋爪委員

柏市だけでなく市町村の最大の課題は、前回もお話させていただいたとおり、地縁組織の弱体化が進んでいることだと思います。どうしても市町村が行政サービスを行っていくためには町内会・自治会が元気でないという将来性が危ういというか、持続可能な行政サービスの提供が難しいという状況があります。次期計画の中にも多様な主体の一つとして地縁組織は当然入っておりますので、次期計画が、市民活動団体と地縁組織が協働・共創していく上で、例えば、若い人の取り込みなど何か地域の問題・課題となっているもののきっかけ作りになればと期待しているところです。このため、資料2の38ページの行動計画（2）市民活動団体等と県・市町村との協働・共創の推進の中で、何か地縁組織に光が当たるような取組を期待しています。

柏市では、来年度から、同じ部の中で、市民活動を支援する組織と地縁団体を支援する組織を別に分け

て、それぞれの担当課でそれぞれを支援する体制を構築し、支援を強化していく予定のため、地縁組織に注視していく良い機会だと思っています。

○鎌田座長

前回、関谷委員が共創というのは実践で、実践の中でコミュニティの再構築と横断的な事業展開という言葉を使っており、実践の中身としていかがでしょうかという御提案をいただいたと思いますが、今の橋爪委員の御指摘などを踏まえて、具体的な課題や、共創の目的、中身をどうするかも含めて事務局の考えを教えてください。

○事務局

地縁組織の活動については、銚子市からも、コロナ禍を経た中で活動が停滞したままとなっているといった御意見があり、来週に銚子市で実施する「協働のまちづくりセミナー」では、コロナ禍を経た中でも頑張って活動している町内会の方などに事例発表をしていただく予定です。地縁組織にも色々あって、若い世代、大学生を巻き込んで活動している団体があり、今年度、てらこやちばさんという団体がコラボ大賞を受賞しましたが、地元の千葉大学や敬愛大学の学生と地元の町内会と一緒にコラボしながら活動しており、県としては、こういった優良事例を皆様に情報共有することにより、地縁組織の活動の活性化につなげていきたいと思っています。

共創については、先ほど、連携・協働というところが数字的に下がっていると御説明しましたが、二極化しているところがあるのではないかと考えています。SNSなどを活用し、積極的に連携・協働して、若い世代を巻き込んで活動している団体もあれば、そういったことが難しい団体もあります。今回、連携・協働に加え、共創を推進していく中で、こうした取組をこれまで以上に推進していきたいと考えています。

○鎌田座長

ありがとうございます。

地縁組織の見せ方もそうですが、コミュニティの再生という共創としての見せ方の方が新たな取組に見えるのではないのでしょうか。関谷委員にこの後補足していただければよいと思うのですが、従来どおり地縁組織のテコ入れをしようというより、コミュニティの再生であれば、新しい価値概念とか、先ほどの大学生を加えるというライフステージとか、ライフステージを理解するための多様な世代の連携とか自体が実践になるという見せ方ができ、その方が新しさが加わると思います。そういうことに役立つようなフレームについては、このイメージ図から理解するというのであればそれでよいと思いますし、実践は今後の推進計画で積み上げていくからそれを待ってからということであればそれでもよいと思いますが、

そこら辺をどういうふうに捉えたらいいのか、こういう理解でいいのか関谷委員の御意見をお願いします。

○関谷委員

コミュニティというものの捉え直しという部分が色々なものの背景にあって、コミュニティの中で従来の自治会をはじめとした地縁組織があつて、それは御指摘のとおり厳しい状況にあるという中で、自治会だったら自治会に色々な人たちが関わる関わり方が、今どんどん多様化してきています。それがなかなかできないでいるところも多いので、それを今後どのように促していくかが重要だと思います。

それと、例えば、学区単位のまちづくり協議会の取組というのも地縁系をもう少し違う形で発展させた取組としてありますから、そういった部分を含めて入れ込んだらよいと思います。従来支えてきたものに色々な手法・考え方が加わることによってコミュニティを捉え直していく、そこには従来の活動もさることながら、共創的な側面も加わってそれがまたコミュニティを活性化させていくところもありますから。多様な膨らみを作り出していくことをうたうと、そういうふうな形でコミュニティの再構築をいつているところはそう多くはないですから、一つの新しい視点にもなり得るかなと思います。

○鎌田座長

橋爪委員、イメージ図からそこら辺まで読み取っていただけますでしょうか。イメージ図というのは詳しく書きすぎると訳が分からなくなってしまうので。

○橋爪委員

そうですね。

○鎌田座長

できるだけシンプルに色々なところを頭の中で穴埋めできる方がよいと思います。

○橋爪委員

イメージ図の説明・解説の所で読み取ればということですね。

○鎌田座長

イメージ図について何か御意見ありますか。このイメージ図については、前回の御意見を上手く取り入れていただき、色々な御意見に配慮されていると思います。

○橋爪委員

関谷委員や鎌田座長がおっしゃられたように見せ方なんでしょうか。どこの計画を見てもそれぞれ良いことが書いてあるのですが、目新しいと言いますか、これはというキーワードがなかなかないため、共創をイメージさせるようなフレーズが入っていれば、千葉県は先進的であるというようなイメージになるの

ではないかと思いました。このため、関谷委員が多様な膨らみとおっしゃいましたが、その辺を上手に解説等でイメージできるようにすればよいのではないかと思いました。

○鎌田座長

資料編の中で、できるだけ共創やコミュニティの変化を新しく捉え直しているような事例を掲載すれば、本編の記載内容を理解するのに役立つと思いますが、柏市では何か良い事例はありますか。

○橋爪委員

大学生が町会長になるなどの取組が始まったり、ICTを使って楽しい交流の場を作り、そこをきっかけに若い人を取り込めるような仕掛けづくり、例えば、公園等でゴミ拾いとカフェを一緒に取り組んだりするなど柏市でも好事例はあるので、他のエリアにも良い影響を与えられるよう宣伝をしていきたいと思います。

○鎌田座長

事務局はその辺どう考えていますか。

○事務局

計画本編の中で共創を定義し、イメージ図を位置付けた上で、資料編の中で色々な共創の事例を御紹介したいと思っています。

○鎌田座長

資料編に掲載するため、先ほど橋爪委員がおっしゃったような、まだ本格的に始まっていない事例もできるだけ集めておいた方がよいのでしょうか。

○事務局

コラボ大賞の事例の中にも、地域の課題解決にとどまらない新しい価値が創出されている取組が見られていますので、こうした事例を含め、資料編の中に掲載したいと考えています。

○鎌田座長

山本委員、先ほどは自治会でしたが、NPO側の視点から見ていかがでしょうか。

○山本委員

共創の説明の文言やイメージ図は分かりやすくなったと思います。

世代に応じたボランティアの推進というところも非常に大事だと思いました。ちばボランティアナビのことも書かれていますが、私たちの団体はちばボランティアナビを通じて、10代、20代の方々の応募が増えたので、その辺りのことも是非記載していただければと思います。

また、資料編についてですが、船橋市では学生の夏のボランティアの取組が長く続いてきていて、私た

ちはコロナ禍で参加を中止していたのですが、今年は4、5年ぶりに再開し、マッチング会を行ったところ、全部で16人の学生が来てくれました。やはり、若い世代の方が学生時代にボランティアに馴染むことで、社会への関心等が大きく違ってくると思うので、その辺りのことも計画に入れ込んでいただければと思います。

○鎌田座長

その辺りのことについても資料編などに入れ込んでいけたらよいですね。

○山本委員

私は船橋市しか知らないのですが、他の市町村でも同じような取組を行っているところがあると思います。確か松戸市などは行っていたと思います。

○鎌田座長

共創やライフステージにつながりそうな事例があれば積極的に御発言をお願いできないでしょうか。

○石毛委員

八街市社会福祉協議会では、毎年夏休みに小・中・高校生を対象とした体験ボランティアを実施しているのですが、やはりコロナの影響で一部の施設等には入れなくなってしまいました。その時に、市内のボランティア団体や消防署等に御協力をいただいて、子どもたちに仕事について実践的に体験できる機会を提供することができました。今年は、協力団体も増え、今までになく60名程の参加があり、全部で18程度の団体とマッチングを行って、現在は、2月に予定している福祉大会において何名かが代表してボランティア体験の発表を行う方向で準備を進めています。

○鎌田座長

具体的にはどのような体験をされたのでしょうか。

○石毛委員

施設に訪問して読み聞かせを行うなど、ボランティア団体をアピールしながら体験をしてもらったり、消防署の協力の下、実際の救命方法などを体験してもらいました。

八街市ではボランティア団体が高齢化しており、どうしても弱小化してきているのですが、ボランティア活動は年代を広げて行うべきだと思いますので、若い人たちができるボランティアを進めていくことを心掛けています。

八街市では、独自に地域の活動に取り組んでいる小学校や中学校もあります。先ほどから大学生の意見聴取の話が出ていますが、八街市の場合、大学に行く方は市外に出してしまうことから大学生は少ないため、高校生までの方に働き掛けをするしかない状況です。今度、12月に地域懇談会というものを中学校単位

のエリアで行うのですが、去年から子どもたちに参加してもらい、子どもたちの積極的な意見を取り入れて大人がそれに向かい合って、子どもたちが成人する頃にはどのぐらい変わっているだろうかという希望を持ちながら、地域に必要なことや、地域でできることについて懇談をしていくという企画です。この懇談会は4中学校区で行われ、1地区60人程度の方が参加する予定となっております。最近、子どもたちがだんだんこういったところに目を向けるようになってきてきていることが有り難いです。

また、ある中学生が推し活クラブを作り、自分たちが八街を推そうと色々なことを企画している例もあります。

○鎌田座長

共創が一つの実践だとしたら、関谷委員も前回おっしゃっていましたが、魅力づくりや魅力の磨き上げを子どもが考えるというのは共創の取組の一例になるのではないのでしょうか。子どもが魅力づくりに貢献しているという達成感が子どものライフステージの中にあることを伝えることは大事だと思います。

○石毛委員

推進計画の中でこういう細かいところまでなかなか書けないとは思いますが、何か計画に付随するもので発表することができれば身近に感じられるようになると思います。

○牧野委員

八街つながりですが、町会・自治会の加入率や活性化がいまいちということで、私たちは八街市の協働のまちづくりP i Tに関わっています。やはり、町会・自治会の活動は地味だし、永遠と昔からあるし、周りから持ち上げられたりすることが少ないので、町会・自治会の自慢大会を提案して毎年行っているのが「八街のいいね！を語ろう会」になります。この自慢大会は、自治会や区ごとに取り組んでいる事例を4つ発表して、例えば、移送サービスを始めた、おしゃべり会を行っている、以前子ども劇場の活動をしていた方が子どもたちへの読み聞かせを行っているなど、町会・自治会という地縁を基盤にして行われている色々な活動を掘り起こして発表してもらい、皆に拍手してもらうという会です。大人はあまり褒められたことがないので、結構嬉しいと感じ、張り切ってプレゼン資料を作ってくれる。地域の中で発表する、拍手をする、褒めたたえるということはすごく大事なことで八街で感じています。

○鎌田座長

それも水平展開ができそうですね。

今回の資料編は、ライフステージごとの事例があってもよいかもしれませんね。民間で共創という言葉は色々ありますが、地域という括りの中で共創という言葉が色々出てくればそれは新しさを感じます。

それでは、高橋委員いかがでしょうか。

○高橋委員

やはりボランティアというのは、人間関係作りをしていくことがすごく大事だと思います。コロナが終わって、やっと去年、今年辺りから各地域でお祭りを盛大に行うようになりましたが、このお祭りも一つの人間関係になりますし、若者もお手伝いしてくださるので、そういったところの人間関係づくりの中からボランティアにつながっていくのではないかと感じています。

先ほどお話があったように、私が住んでいるところの社会福祉協議会でも、必ず夏休みは皆さんにボランティアの募集をかけています。地区でお弁当を配布する際に、対象者の方に書いていただいたお手紙を添えて訪問し配付しています。また、今年は、小学生が雑巾の作り方を手芸ボランティアの方に教えていただき、雑巾を縫って施設にお届けしました。さらに、小学生・中学生と一緒に土嚢作りも行いました。こういったボランティアは大人になった後もつながっていくと思いますし、災害支援にもつながります。小さな動きかもしれませんが取り組んでいくことが大事だと思います。

私たちの地域では、こども園の子どもたちと一緒に、高齢者の御自宅へお弁当をお届けしており、それについて3月に1人ずつ感謝状を渡しているのですが、保護者の方には、今はボランティアがどういうものか分からないかもしれないけど、大人になった時にこれがボランティアの始まりだったことを子どもたちに伝えてあげてほしいとお話させていただいています。

やはり、まずはそういった人間関係を作っていくことが大事だと思いますし、1人で何かに入っていくことはとても厳しいものがあるので、私は今日、大学生のアンケートをお伺いさせていただいて、この後の世の中も心強いと思いました。私たちは今、ボランティアに一生懸命取り組んでいますが、私たちが動けなくなったらこれで終わってしまうのか、困った時に助けてくれる人がいなくなってしまうのか不安でしたが、大学生のアンケート結果を聞くと大変心強く感じました。

そして、子どもたちを誘うと親御さんが付いてくるので、子どもたちが行っているボランティアを親が見てくれるので、そこで、親御さんがボランティアに参加してくれるようになる場合もあります。ボランティアに参加してくれる若い人を探してもなかなか見つからないので、高齢でも出来る方にはボランティアに参加していただきつつ、そこに若い人が混じって参加できる仕組みづくりが必要だと思います。

それと、資料2の4ページのイメージ図について教えてください。イメージ図はよくできていると思いますが、地縁団体と中間支援組織は何を指しているのでしょうか。

○事務局

資料2の3ページに定義やこういった団体が該当するかについて記載しており、7ページにそれぞれの主体の役割について記載しております。

○高橋委員

分かりました。後でしっかり読ませてもらいます。

○鎌田座長

人間関係の構築で今気付いたのですが、どうしても共創というと新しいものばかり追いかけがちですが、雑巾とか土嚢とかも初めての子には十分それも共創になって、それを親御さんたちが脇で見ている。そうすると関谷委員がおっしゃるようにまた協働に還ってくる補完の関係が成立するのではないのでしょうか。見方次第で日常の中に事例はたくさんありそうで、先進事例ばかりでないのではないかと思いますので、資料編では、その辺もポイントになるのではないかと感じました。

伊藤委員いかがでしょうか。

○伊藤委員

皆さんの話を伺っていて、やはり事例から理解を深めるということは非常に重要だと感じました。

先進的でなくても色々な課題を抱えている事例を知ることによって理解が深まると思っていて、私の住んでいる地区でもコロナで中断していた子ども神輿が今年復活し、子ども会がなくなったことで、参加する子どもが集まるのか不安だったのですが、結果的には50人程度が参加してくれました。

やはり、何か取り組むことで生まれるものがあることを再確認し、そういったことに参加してくれた子どもが地域に愛着を持つことになるのだらうと感じました。

○鎌田座長

大学生の意見聴取の結果を聞いて私からも発言させてください。

「活動に参加する理由」として、「家や大学以外での人間関係や居場所づくりにつなげたい」との回答があったとのことですが、今の大学生を見て思うのは、人間関係に非常にデリケートで少し言うとなすぐに逃げたいと感じてしまう。私の研究室の学生は元々、ちばMDエコネットさんに御協力いただき、実践の場を通じて人間関係や距離感について学び、自然と恐れなく育っていったので本当に良かったと思うのですが、今はそういった実践の場があまりありません。だから、今の学生は人間関係を怖いと思ったり、人間関係に何か答えがあるだろうと思ってしまい色々と調べてしまう。そういう裏返しで、分かりやすい共創といった実践を通じて学べたりすると若い方にとってよいのではないかと思います。

それでは、関谷委員いかがでしょうか。

○関谷委員

まず、4ページのイメージ図ですが、前回よりすっきりした概念図になってきていると感じました。その上でですが、協働と共創はどう違うのかという点について以前から考えているところでして、定義は

この内容で分かると思います。ただ、共創の定義に書いてあるそれぞれの視点や価値観のもと、新たな魅力の創出や資源の再発掘、新たなサービスの創出など、新たな価値の価値が創出されることについてこの図でいうと、青い中心部が上に出るイメージになるのではないのでしょうか。色々な主体が関わるのは協働を表し、団体と団体の連携や学校と企業の連携など、協働で色々な組み合わせの連携事業を行うというのはこれまでも行ってきました。

そして、正に実践の中から色々動きを作っていくということで、共創で新たな価値創出と言うことは非常に大事です。そのイメージはどういうものかという、二つポイントがあると思っていて、一つは地域への関わり方というのが色々な形で生み出されているということです。例えば、自治会の活動に民間企業が関わっていくとか、学校に様々な事業者が関わっていくなどのように、従来のコミュニティの枠組みはあるのだけれど従来とは違う色々な人たちが参加していくことによって、企業もコミュニティとつながることで新たなビジネス機会を創るといった価値創造を行い始めています。既存のコミュニティに新しい形で関わっている、関わり方の多様性というか新しさというものが色々な形で出てきていて、これが正に共創だと思います。単なる連携というだけではなくて、そこに関わることによって、関わった人たちが色々なものを創り出し、生み出している。個人というところで言うと、ある種の自己実現のようなものであるし、企業であれば新たな形での活動を創り出すなど、そういう新たな関わり方というのがまず一つあるのかなと思います。

もう一つは、ライフステージとの関わりなのですが、共創と言うことで出てきているのは、例えば、多様な学び方や働き方、多様な老い方や支え方といったものになるのではないかと思います。私が今、大学で看護の先生方と一緒に取り組んでいるエンド・オブ・ライフケアというものは、要するに最期の迎え方のことです。そういったことをコミュニティや地域の現場で取り組んでいく、そこに色々な多様性が出てきています。また、例えば、プロボノなどは色々言われていますけれど、要するに新たな働き方とか、新たなスキルの活かし方ということで、職業上身に着けたことをコミュニティやボランティアで活かし新たな価値を創っていく、すなわち、働く本人からすれば企業で働くということも一つだけれども、自分が持っている同じスキルを地域の現場で発揮することによって、本人の中で新たな価値が生まれたり、新たな自己実現を果たせたりするなど、そういう関わり方が出てきているのではないかと思います。

例えば、老い方という部分も、従来はリタイアしたら老人会に入っていくというのが一つのパターンでしたが、現在は、これまでに身に着けた経験やスキルをもっと色々なところで活かせるよう橋渡しを行っています。それが、コミュニティにおいて、これまでの会社とは違う居場所、違う活躍の仕方ということができるようになって、それも一つの共創ということで、地域の活動に関わっていくことが新たな価値を生み

出していると思います。

同じように、最期の迎え方というものもあって、昔から死はずっと棚上げで、行政にも死を扱う部署はなく、あっても共同墓地の管理ぐらいだと思いますが、今、ケアの最前線では、最期をどう迎えるかという視点で様々な取組が行われています。例えば、ホスピスなどはずっと言われてきていて、それは余命半年とかと言われてからのケアのことですが、もう少し手前の慢性疾患だけ通院していればまだまだ元気な人や、あるいは、もっと元気な人に対して、人は必ず最期は死を迎えるものだから、最期の死の迎え方に向けて、どんな歩みができるか、どんなサポートができるかを考えるのが今のケアの最前線となっています。そういう中で、色々なアンケートを取ると、最期は自宅で迎えたいと回答する方が圧倒的に多いです。そうだとすると、自宅で最期を迎えるといった時には、当然、家に来てくれる医師・看護師、周りで橋渡しやサポートをしてくれる専門家、隣近所から始まる地域でのサポートなど、色々なものがないと自分が望む最期を迎えられません。そういうことをどんどん行っていこうという流れになっています。そうすると、最期を迎えるという中にも色々な参加があって、色々な取組ができます。

いずれにしても、学び方や働き方、老い方、最期の迎え方といったライフステージを考えていく時に、新たなものを創っていくというのが共創ということで問われていることなのかなと思います。そういう色々な個々や団体が求めることを膨らませていくための支援をしていくことが共創に関する事業ということなのかなと思います。

なかなかまとめづらいとは思いますが、言おうとしていることは多様な生き方ということが正に問われていて、そういう中で色々なことが出てきているということを申し上げておきたいです。今言ったことを全て書くことは不可能ですけど、協働というのは連携の協働で、共創というのはそこから更に、今申し上げたような色々な場面で新たな価値づくりを行うことであり、新たな価値づくりの中身というのは新たな学びや支え方、働き方などのことだと私はイメージしています。こういうことが色々な地域の中から更に生み出されていく、そこに関わることによってそういうことができるというイメージでいけばよいと思います。

そして、資料編に掲載する連携・協働・共創の取組の事例ですが、先ほども申し上げた学区単位ですとか、学区でなくてもその地域ならではの区割りの中での多様な主体の連携が言われていて、最近では、学区をベースとした協議会づくりが注目され、総務省がかなり率先してうたったりしています。そういう取組もコミュニティの再構築の一つとしてあって、それがどういう可能性を持つのかということも共創の視点でどんどん膨らんでいます。

これから取り組もうとしている例を一つ申し上げますと、香取市では23ある小学校区のうち、22の

小学校区でまちづくり協議会が立ち上がっているのですが、10年が経過し本格的な取り組みに入っています。一例を申し上げますと、香取市では、11月24日に発酵と観光のまちづくりフォーラムを開催するなど、発酵に改めて注目して様々な取組を行っています。発酵というのは各協議会の中でその土地・地域ならではの発酵の文化があり、ある地域では、地元の方が長い間味噌づくりを行って来ています。地元のまちづくりの中で行って来た味噌づくりというものに発酵の専門家が入って行って、色々なコラボをして、それをその地域で営んでいけるビジネスにしていくという発想です。こういったまちづくり協議会とビジネスという関わり方というのも一つの共創なのだと思います。そうすると、徐々に自走ができるようになっていき、そこで伝統的な味噌だけでなく、もう少し違った商品を作ったり、さらに、今度は流通の専門家が入りどこかのコンテストに応募したりするなど裾野をどんどん広げていくということを行おうとしています。そういうふうになっていくと、その地域ならではの昔から伝わってきたものを今の時代に新たな価値を加えてまた新たな動きをしていくというのも、可能性として膨らんでいくところもありますので、資料編の事例としてもよいかもしれません。まちづくり協議会でビジネスを行う事例はあまり見ないので、申し上げたところです。

最後に、イメージ図について、この図の中には市町村行政と県行政が入っていますが、もう一工夫あった方がよいと思っています。例えば、自治会や街づくり協議会などに対し市町村が行っていることが色々あるのですが、それだけでは足りないこと、できないことがあります。そういった時に県が補完・サポートするというふうな形で、共創を作っていく中に市町村と県のそれぞれの立ち位置と役割があるので、それを明示した方がよいと思います。両方が同じことを行うというよりもそれぞれが違うことを行った方がよいと思います。例えば、共創の取組をどんどん膨らませていくといった時に、市町村とは違ったもっと広範囲なもの、今も専門家を送り込んだりとか、色々な学びの場を作ったりとか行っていますが、県として取り組んでいることがあるので、市町村で行っていることと県で行っていることを共創させていくという意味で、県と市の違いを見せることができればこの図はよりクリアになると思います。

あと、先ほど申し上げたまちづくり協議会であればこれからどうなっていくのかということ、おそらく、市の中で学区だけのことに取り組んでいくということではなくて、例えば、香取市で行っているのは、浦安の子どもたちをまちづくり協議会で呼んで、そこで色々な交流を行うという取組も始まっており、越境的な取組を行っていくとか、ほかの街のまちづくり協議会と交流をしていくといった、そういう意味での広域連携を模索しています。そして、その橋渡しというのは市町村では難しいところがあるので、そういう時に県が間に入れば広域連携がもっと良くなってくると思います。そういう意味でのそれぞれの行政の役割を意識できるとよいと思います。

言われたことを図に入れ込みすぎると難しいところがあると思いますが、そういう視点があるということをお願いしてみました。

○牧野委員

関谷委員のお話によると、この図は3Dにならないと表現できないのかもしれませんが。

○鎌田座長

おそらく円錐台の形でそれぞれフェーズが異なってくるようなイメージになるのだと思います。また、内に向かっている矢印は一色ですが、矢印一つ一つが共創になり、多様な主体をつないでいる黒い線も共創になるのだと思います。そして、一つが変化すると全体像が変化するのだと思います。だから、3D表現を試みたら非常に新しいと思います。もしかしたら、AIが作ってくれるかもしれません。

一方、3Dのイメージ図を作成することが難しくてできない場合の別の方法としては、矢印が変化したことによって大きく変化するといったことを事例として取り上げればよいと思います。現時点のイメージ図は平面のものです。例えば、神崎町の発酵の里の取組を例に、図の中にあるどこかの部分の矢印のコラボができて、できあがった発酵の里がこういうふうに変化してといったことを示すことができれば分かりやすくなると思います。

また、ライフステージについてもステージごとに色々な関係図ができていくので、図化すると面白いかもしれません。

まずは、このイメージ図から出発するとしても、できるだけ体系的に事例を掲載すれば、分かりやすくなりますし、新しい試みになると思いましたが、皆さんいかがでしょうか。

○牧野委員

この図でみると、共創というものが分かりづらく、今までの協働とあまり変わらないのではないかと感じてしまいます。今まで連携・協働に携わってきた立場から言わせていただくと、特定の主体が集まって何かに取り組めば協働ということで、協働のための協働のような弊害も生まれきています。そういう意味でいうと、共創というのはそこから一歩抜け出し、色々な物事に対して、多面的な視点を入れることで新たな価値が見えてきて、その成果として、新たな関わり方や成果、スキル、学びなどにつながっていくというこの全体が共創なのではないかと思いました。だから、今までの連携・協働と一段階違うと感じたので、是非3Dのイメージ図を作成していただければと思います。

○鎌田座長

3Dというのは才能で、立体視ができる人とできない人がいます。建築のトレーニングを受けていると3Dは頭の中に自然と出てくるので、2次元の図から立体視をすることができます。実際に良いものは

動画でなければ難しいかもしれませんが。

いずれは3Dにするかもしれませんが、現時点で3Dを是非という意味ではなく、このイメージ図が理解しやすくなるよう、先ほどの神崎町の事例のようなものを体系的に紹介すると分かりやすくなると思います。関谷委員はいかがでしょう。

○関谷委員

3Dの図が描けるのであればそれが一番イメージしやすいと思いますが、イメージ図は可能な範囲で構いません。あとは、鎌田座長がおっしゃるように、こういう事例が図に照らすとこういう意味を持つんだということを上手に示していければそれだけでも大分異なってくると思います。

ポイントは、新たな関わり方と新たなライフステージの広がり方といった2点を新しい価値づくりの中身として意識していただけるとよいと思います。

○鎌田座長

事務局から確認しておきたい事項は何かありますか。

○事務局

先ほど県と市町村の関わりというお話をいただきましたが、資料2の8ページにおいて、県は広域自治体、市町村は基礎自治体であり、それぞれの役割は異なるということを記載しています。イメージ図では役割の違いを表現することが難しいところですが、イメージ図については先ほどの御意見も含めてもう一度検討したいと思います。

○鎌田座長

それでは、計画素案全般と共創の定義・イメージ図、大学生の意見聴取、資料編について、非常に横断的に御意見を伺ったため整理は大変でしょうが、事務局には議事録の作成をお願いいたします。

委員の皆様は何か言い残したことはございませんでしょうか。山本委員いかがですか。

○山本委員

福祉というのは障害者を支援するというふうに見られて、障害福祉と言われており、そういう視点で周りの人も関わるのですが、先ほど関谷委員もおっしゃっていた老い方というか、障害者の方も年老いていくので、障害者サービスと介護保険をどうやって使うのかが今現場で問題となっています。今まで使うことができた障害者サービスが、高齢化して、介護保険でも使えるのかといった問題に直面し始める前段階になっています。

このため、私たちも高齢者の課題などを考えていたのですが、私たちが障害のある人もない人も共に働くことができるカフェひなたぼっこを運営していたら、常連の方が地域の社会福協議会の方など、私た

ちと接点がないほかの福祉の方を呼んできてくれたりしました。今までだったらつながり得ないところ、言い換えれば、今まであったつながりのその先の関係性となつがることで、広く推進力が高まっていくのを感じました。それは、地域だからできてきているような気がします。今日の共創の話と自分が関わっていることに対し少し理解が深まったという実感があります。

○鎌田座長

そういう計画になってほしいですね。

○事務局

1点質問させてください。先ほど関谷委員が県と市町村の役割についてお話されておりましたが、中間支援組織も同じように役割を分けておいた方がよいのでしょうか。

○牧野委員

私が思うのは、例えば、NPOクラブは中間支援組織と言われますけれど、各市町村にある各市民活動支援センターも中間支援組織であり、福祉のボランティアセンターも中間支援組織であるし、重層的な相談窓口もまずは相談を受け取って必要な支援窓口に振り分けたり、つないだりするのである意味で中間支援組織だと思います。計画では県民活動を推進するための意味で中間支援組織を使っているとは思いますが、色々な分野での中間支援組織が県内にはあるのだと思います。

○事務局

中間支援組織のハブ機能に着目した場合、ある種県行政に近く、関わり方がほかの主体とは違ってくるのではないかと思いましたが、役割的には特に分けなくてもよいということですね。

○牧野委員

そういう意味でいうと、県民・ボランティアは他とは異なり、組織ではないから花丸でよいのかもしれませんが。

○山本委員

今ボランティアの方を受け入れていて思うのは、個人で色々経験したいから、特定の団体に加入しないでボランティア活動に参加している方が、特に若い人に多いように感じます。その活発な個々人を共創のイメージの中の一つの主体に入れ込むと、ほかとの違いが見えづらくなるような気がします。

○関谷委員

それは先ほど申し上げた関わり方の多様性の話になります。今までは団体に所属するという形で関わるのが中心でしたが、色々なことに取り組みたいから個人としてこのプロジェクトの時にはこちらに関わるけれど、プロジェクトが変わったら別のプロジェクトに参加するといったように、これが新たな関わり方

で、その人にとってみればボランティアを通じた自己実現的な意味合いになります。その多様な関わり方を上手に表現できればよいと思いますが、図だと難しいので文章で説明できればよいと思います。

それと中間支援組織についてですが、中間支援組織もそれぞれの分野や領域、業界の中での中間支援というものもあるし、協働ということであれば、色々な活動団体を横につないでいく中間支援もあります。共創ということで問われる中間支援組織には、例えば、先ほどの個人として色々なところに参加できるように 裾野を開いたり、橋渡ししていく役割が求められていて、そういう意味では、中間支援組織の役割は共創になればなるほど膨らんでいくというイメージです。

○鎌田座長

そういう意味ではこのイメージ図は成功していて、これだけ色々な膨らみを引き出す力があるということで、本来の図の役割を果たしているということではいかがでしょうか。できるだけ事例など文章で丁寧に説明していくという方向ではいかがでしょうか。

○事務局

県民・ボランティアといっても色々な関わり方があり、中間支援組織も色々な関わり方があるということについては、資料編の中で参考事例として紹介しながら表現できればと思います。

○鎌田座長

共創の参考事例を見ながらこのイメージ図を見ていただくと、色々な見え方が立体視できると思います。

○事務局

資料編の中で、これがなぜ共創の事例に当たるかというところを丁寧に説明することで、色々な関わり方があるということを示すことができればと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。

議題（２）その他について

○鎌田座長

それでは、議題の（２）その他ですが、事務局から何かありますか。

○事務局

事務局の方から、今後のスケジュールについて御説明いたします。

本日、１１月２１日に第２回懇談会を開催させていただきました。今後、市町村と庁内に意見照会を行い、今日の皆様の御意見も踏まえまして、計画原案の策定作業を進めてまいります。１月９日にＺｏｏｍで開催予定の第３回懇談会では、この計画原案について御討議いただく予定です。

その後、1月下旬から2月下旬ぐらいにかけてパブリックコメントを実施し、その意見を取りまとめて、最終案を作成いたします。3月18日にZ o o mで開催予定の第4回懇談会での御討議を経て、年度内に計画を策定できればと考えております。

引き続きご協力いただけますよう、よろしくお願いいたします。

○鎌田座長

ありがとうございます。それでは、事務局にお返しします。

○事務局

鎌田座長はじめ、委員の皆様におかれましては、長時間にわたり活発な御議論いただくとともに、貴重な御意見を賜り、誠にありがとうございました。

頂戴した御意見を踏まえ、この後、計画原案の策定作業を進めてまいります。

以上をもちまして、令和7年度第2回千葉県県民活動推進懇談会を終了します。本日はありがとうございました。